

國學院大學学術情報リポジトリ

選評

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-02-05 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	https://k-rain.repo.nii.ac.jp/records/182

選 評

中山 陽介 (文学部日本文学科三年Ⅱ平成二十七年年度)

仮名成立史上の西三条第跡出土土器墨書仮名の位置付け

この論文は、平安時代初期の藤原良相邸の「百花亭」から出土した「墨書土器十四」を解読し、研究したものである。以下の三項の成果により、優れた論考であると認める。

一、斯界で初めて解読に成功し、これは宴などに使う和歌を書き付けたものであるとした。発掘調査報告は二〇一一年に図版と共に公開され、この五年間に幾つかの研究があるも、解読に成功した者は出なかった。それを読み解き、平安時代中期の和歌より「いくとしも」の句を持つ和歌を新たに三首探し出し、それらの内容を比較し、この歌は行く末短い我が身に加わる憂いを詠んだ歌とした。解読から和歌と断定する手法は手堅く、眼力も確かである。出土土器墨書中に、同様に歌会で発表の歌の草稿や推敲の記録が残されている可能性があることを示唆し、斯界の今後の解読研究の発展に寄与する重要な論文である。

二、墨書の仮名の様式は「繋ぎ」が発達し、点画や字を続けて書く段階に至っているが、女手らしい連綿の「均し」はまだ未発達の部分があり、成熟した女手の「流し書き」に至っていないとした。各文字と代表的な行草と女手とを比べて、点画の簡略・連続・省略の細かな分析から、女手の成立に必要な「六則」を導き、仮名の上下の字の連綿の発達の様式の差異をも加えて、仮名発展の構造を分析した。これは従来の印象的仮名発達史観に比べると、具体的に説得力があり、仮名様式変遷の各段階を考える手法に、新機軸を打ち出した。分析検討はなお別の資料による蓄積をも要するが、手法は実証的で、画期的な結果となった。

三、墨書と最も年代に近い、藤原有年申文(八六七AD.)と東寺檜扇(八八〇AD.)の同字を「繋ぎ」と「均し」の法則を中心として比較分析した。その結果、申文は「繋ぎ」は成立しているが字形の簡略化が墨書に比べると前段階にあり、「均し」の法が成立してはいない。檜扇は、文字の形は飛躍的な差はないが、「均し」が少し進行しているとした。それで墨書仮名の成立は、様式から分析すると両者の中間頃の時代、貞観後半から元慶初頭(八六八―八八〇)とし、考古学的な研究成果と矛盾がないとした。

そして女手の完成は、墨書以後五六十年間に、古今集の成立を経て「均し」の技法を成熟させて「流し書き」が成立することによって達成されたものと推定する。

以上、女手の成立につき、文字形態を客観的に分析し、様式をふまえ、前人未到の四区分説を提出したことの意義は大きい。

田中 章博（文学研究科史学専攻博士課程前期一年≡平成二十七年年度）

江戸時代後期における雅楽器への価値の付加に

関する一考察

— 紀州徳川家・井伊家コレクションの笙を中心に —

本論文は、雅楽で用いられる楽器について、従来の古楽器研究や工芸品としての美術史的研究ではなく、江戸時代後期の大名などによるコレクション形成の過程で付加的な価値付けが行われていたことを歴史的に論証しようとした論文である。具体的には、市場価値を高めるためか偽銘資料が多いこと、また権威ある楽器商の存在を指摘し、問題提起から無理無く結論に

至っており学術論文としての水準に達していると思われる。

論文は、四部で構成されている。1は「笙の銘文の偽造とその様相」と題し、井伊家コレクションや宮内庁三の丸尚蔵館収蔵の笙の銘文を、先学の指摘に導かれながら分析し、偽銘の存在を確認する。2は「付加価値」としての銘文の意義」で、銘文改竄や偽銘品の制作が何時頃行われたのかを、『楽家録』や『集古十種』などに載る銘文との関係から江戸時代後期であるとする。3は「楽器商神田の認定」と題し、大名家がコレクションするにあたっての入手先を検討し、楽家から譲り受ける以外に楽器商からの購入があることを指摘し、京都の楽器商神田家の存在に注目する。神田家による雅楽器売買の独占と鑑定権威による価値の保証による名品収集の実態を説明している。4は「付加価値としての笙箱と蒔絵」で、楽器本体ばかりでなく付属する笙箱や袋などの付属品が作られた時期、また本体の蒔絵装飾が施された時期などの検討から、もう一つの付加価値を位置づける。

これらの検討により、純粹に楽器としての価値から、鑑賞品、愛玩品としてのコレクション的価値へと変化（筆者によれば「演奏するための楽器」から、「蒐集し愛玩する美術品」という位置づけの変化）する過程で、銘の改竄、偽銘品の制作、

そして蒔絵による装飾の追加や付属品の新調などが行われるとともに、権威ある楽器商による鑑定と保証により高値で売買されるという状況を現出したと結論づけている。

冒頭で述べたように、史学論文として一定の水準に達しているとは思いますが、銘文資料の掲出方法、註の付け方等にもう一工夫が欲しいところである。

なお、今後の研究の方向性として、本論文の指摘する「価値の付加」は、雅楽器に限らず他のコレクション対象品にも及ぶので、今後はさらに視野を広げて、この問題を追及することが望まれる。

平成二十八年年度 國學院雜誌学生懸賞論文募集

一、応募資格…第一部門 (本学文学部・神道文化学部生・別科在籍者)

第二部門 (大学院文学研究科・専攻科在籍者)

一、枚数…四〇〇字詰四〇枚～五〇枚以内

一、テーマ…題目は問わない。

但し、未発表学術論文に限る (卒業論文も可)

一、締切日…平成二十九年三月末日 (当日消印有効)

一、入選…賞状ならびに副賞 (五万円)

佳作…賞状ならびに副賞 (三万円)

一、発表…入選論文およびすぐれた佳作論文は本誌に掲載予定

載予定

一、選考…國學院雜誌編集委員会

一、投稿先…國學院大學総合企画部広報課

詳しくは本誌表紙裏面を参照